

天文教育における二人の大家

——村上忠敬先生と鈴木敬信先生——

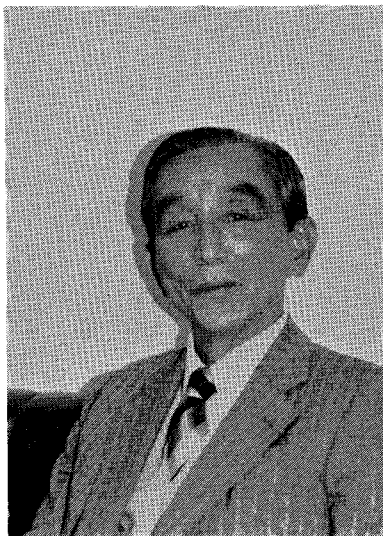
内 海 和 彦*

戦前、戦後を通じて、多数の著書、翻訳書、雑誌などによって、天文学の啓蒙と教育に活躍し、戦後の大学で一般教育と教育学部における天文教育に中心的な役割を演じられた東西の両雄が鈴木敬信先生と村上忠敬先生である。

村上先生は昨年2月11日に、77歳で亡くなられた。鈴木先生は80歳を過ぎてお元気で執筆を続けておられる。

私が天文に興味を持ったのは小学校3年のころだったが、終戦直後の物資が不足した時代で、本や雑誌もなかなか手に入らなかったが、間もなく誠文堂新光社の「子供の科学」を愛読するようになり、口径3cmの単レンズの対物レンズで30倍程度の望遠鏡を自作して、月、惑星、星団、星雲などを熱心に観測するようになった。昭和24年に誠文堂新光社から「天文年鑑」が発行されたが、「天文年鑑」や「子供の科学」の記事の大部分は鈴木先生が書かれたもので、当時の私は胸を躍らせて、むさぼるように読んだものである。

ちょうど同じころの昭和24年8月、私の郷里姫路市の映画館で「天文講演と映画会」が開催され、当時広島高師教授だった村上先生が「宇宙の歴史と太陽系の起源」という題で講演され、その後で昭和21年北海道の礼文島で見られた金環食の記録映画「ビーズの太陽」な



晩年の村上忠敬先生

どが上映された。村上先生の講演の内容はほとんど記憶していないが、大変な感動を覚えた。この講演や鈴木先生の記事などによって、私の天文熱はますます高まり、ついに天文学を専攻することになって行くが、このように私が天文学を志すきっかけになった二人の先生と自分が後年深いかわり合いを持つことになるうとは全く想像だにしないことであった。

昭和36年東大を卒業して大学院に入り、藤田良雄先生について低温度星の研究を始めることになったが、そのころは岡山天体物理観測所が活動を開始したときで、恒星の研究は現在の電波天文学のような活気があり、私も夢中である。昭和41年に東京学芸大学に就職したが、学芸大には鈴木先生と島村福太郎先生がおられた。鈴木先生と島村先生は仲が悪く、お二人が顔を合わさないように時間割が組んであったというのは有名な話である。鈴木先生とは先生が昭和43年に定年退官されるまでの2年間を一緒に過ごし、大きな影響を受けた。昭和45年村上先生が定年1年前で広島大学を退官し、広島女学院大学学長に就任された。そのため広島大学では天文学の教官を公募した。私は当時学芸大で天文学専攻の学生諸君と一緒に、多忙ながら充実した日々を送っていたが、運試しのつもりで応募したところどういふ訳か選ばれて、昭和45



鈴木敬信先生（右から二人目）：昭和43年東京学芸大学の卒業式に天文学専攻の卒業生達と共に

* 広島大総合科学部 Kazuhiko Utsumi: Prof. T. Murakami and Prof. T. Suzuki; Two Authorities on Teaching of Astronomy

年 10 月から私が村上先生の後任として広島大学で天文学を教えることになった。村上先生は日本天文学会の年会でお見かけしたことはあったが、直接お会いするのは広島に行ってからが最初であった。広島に来てからも、先生も私もかなり多忙で、年に 1, 2 回お会いする程度のお付き合いしかなかった。ところが、昭和 55 年に広島の新タナカメガネがタナカ眼鏡学校を開校することになり、村上先生が校長になられ、私もそこで光学を教えることになったことから、週に 1 度は先生と顔を合わせるようになり、少し後になって広大理論研の田辺健茲氏(現タナカ眼鏡学校校長)を加えた 3 人が週に一度は昼食を共にするというすばらしい機会に恵まれ、それは先生が入院されるまで続くことになる。

以上、村上、鈴木両先生と私とのかかわり合いについて述べたが、お二人にはいろいろな共通点と相違点があり、比較してみると興味深い。

鈴木先生は明治 38 年(1905 年)東京生まれで、お名前の敬信は、皆「けいしん」と呼んでいるが本当は「たかのぶ」だということを直接先生から聞いたように思う。村上先生は明治 40 年(1907 年)鹿児島生まれで、お名前の忠敬は一般には「ちゅうけい」で通っているが本当は「ただよし」で、先生の父君で鹿児島市の第七高等学校の物理学の教授で、月の運動の研究をされていた村上春太郎先生が伊能忠敬にあやかるようにということで忠敬とつけられたが、「ただたか」では少しおそれ多いので「ただよし」とされたそうである。

鈴木先生は東京帝国大学天文学科を昭和 4 年に、村上先生は京都帝国大学宇宙物理学科を昭和 6 年にそれぞれ卒業されたが、お二人とも、卒業後間もなく、私が知っている範囲でも、次に示すような著書や翻訳書を次々に出され、30 歳までに既に有名人になっておられた。

1931年	天空の科学	鈴木敬信・国富信一著	アルス
1932年	天文学・ラッセル・デュガン・スチュアート著	鈴木敬信訳	岩波書店
1935年	天文学通論	関口鯉吉・鈴木敬信著	地人書館
	球面天文学	上, 中, 下 鈴木敬信著	岩波書店
	暦と迷信	鈴木敬信著	恒星社
1933年	天文学辞典	山本一清・村上忠敬著	恒星社
1934年	全天星図	村上忠敬著	恒星社
1935年	大宇宙の旅	ジーンズ著 村上忠敬訳	恒星社
1937年	膨張する宇宙	エディントン著	恒星社
		村上忠敬訳	恒星社
	図説天文学講座	山本一清編	恒星社

村上先生は 70 歳を過ぎても大変若々しかったので、初対面の人から「村上忠敬先生のご子息ですか」とよく聞かれたそうである。

村上先生の著書では何と言っても「全天星図」が有名である。「全天星図」は昭和 9 年に出版されたが、当時先生は名古屋の金城女子専門学校教授であった。先生と昼食をしていたとき「毎日少しずつ星を記入していったが、一つ一つの星は皆太陽と同じような星だから、一つでもゆるがせにはできないと思って大切に記入した。」と言われたのを憶えているが、先生の人柄がよく現れていると思う。この「全天星図」では星座の境界線が曲線になっている(後述を参照)が、解説として、第 1 章「天球とその回転」、第 2 章「星座と恒星天」、第 3 章「太陽系の天体」があり、星図の後にも「星座とその著しい天体案内」、月面図と月面案内」が付いていて、これだけで天文入門書として使用できるようになっていた。このような星図としては 1910 年が初版の「Norton's Star Atlas」などがあるが、日本の星図としては画期的なものであった。戦後の昭和 22 年に「全天星図」は縮刷版として改訂出版されたが、「星座とその著しい天体案内」は省かれている。昭和 33 年に出された改訂版では、ご長男^{すみなお}処直氏(防災科学研究所長で、地震などの災害のときにテレビによく登場する方)の協力によって星図を書き直し、星座境界線を国際天文同盟による赤経・赤緯に平行な直線に改め、初版にあった「各星座とその著しい天体案内」を補訂復活し、処直氏との共著になっている。この改訂は昭和 32 年末のソ連の人工衛星スプートニク 1 号の打上げによって、星図の需要が急激に拡大されたことが大きな理由になっているようで、私がお世話になったのもこの新版である。戦前の「全天星図」で星座を覚えたおかげで、終戦直後の満州やシベリヤで夜間に南に向かって逃げて無事日本に帰れたという人に何度か会ったことがあるということを、先生がうれしそうに話しておられたのを思い出す。

鈴木先生の筆の速さは有名で、ラッセル・デュガン・スチュアートの「天文学」の、日本語で 968 ページの翻訳をわずか 1, 2 週間で完成されたという伝説があるほどである。また、「天文学通論」は戦後何度か改訂され定評ある教科書になっている。鈴木先生の戦後の翻訳書の中に「天文学の最前線」(昭和 32 年)に代表される F・ホイルのものが多数あるが、ホイルの「宇宙と人間」昭和 42 年の中で、当時はまだ一般にはあまり知られていなかった NASA = National Aeronautics and Space Administration (アメリカ航空宇宙局)を先生が、National Academy of Science of America の略とされたとき、何人もの人達が書評で一斉に攻撃したが、これも裏を返せば、鈴木先生があまりに有名なために読者が信用して

しまうおそれがあったためだとも言える。

私が広島大学へ行くことになって、鈴木先生のお宅へごあいさつに伺ったとき、先生が「もう広島へ行く元気はないと思うががんばるように。」と言われたのを記憶していたが、あまり深い意味があるとは思わなかった。ところが、かなり後になって、鈴木先生が大学を卒業された直後、しばらくの間広島の中学校（旧制）の先生をしておられたことを知った。数年前から広島大学の私の所に、長年小学校校長をされ、広島青少年文化センター館長でもあった斗榊^{とまき}正氏が研究生として来ておられ、小・中・高校生を対象として天体観測や天文学を熱心に指導されているが、斗榊氏が県立広島一中（現広島県立国泰寺高校）5年のときに、鈴木先生が赴任され、物理を教えられたそうである。斗榊氏は、鈴木先生から天文学は教えてもらわなかったが、物理の授業で天文に関係したことを教えられ、大変印象深く、後年星が好きになったのは鈴木先生の影響があったのかもしれないと言っておられる。江戸っ子で気の短い若いころの鈴木先生は、正に漱石の「坊ちゃん」をほうふつさせるが、当時の広島の中学生にとっては本当にすばらしい先生だったと想像される。

鈴木先生と村上先生はともにかなり長身の美丈夫で、実際の年齢よりずっと若く見え、女子学生に人気があった。鈴木先生は大柄でダブルの背広がよく似合い、村上先生はそう身ではあるが古武士のような風格があり、お二人ともひじょうに姿勢がよいことが共通している。両先生とも講義がすばらしくうまく、スピーチも抜群に上手であった。鈴木先生は頭の回転がものすごく速く、べらんめえ調で相手を攻撃するときには大変迫力があつたが、一方では、子ども相手のわかりやすい解説も得意で長年TBSの「ラジオ子ども電話相談」の回答者としてあの無着成恭氏などと一緒に楽しくわかりやすい回答をされていた。

村上先生は人前では目をつぶって話されたが、その癖は若いころ女子高専で教えたので一人の生徒をじっと見ないようにするためだったそうである。また、村上先生は長年、核禁広島県民会議議長として平和運動にも大活躍され、ヒロシマの声を世界に訴えられた。

大学でのお二人については、鈴木先生の場合、地学教室に属していて、学芸大の一般教育としての天文学、理科の学生に対する専門の講義を担当される他、天文学を専攻する卒論の学生を指導されていたが、村上先生の場合は教養部であったために、広島大学の全学部の学生の一一般教育としての天文学と、併任として教育学部・学校教育学部の天文学の授業を担当されるだけで、天文学専攻の学生はいなかったが、村上先生は広島大学天文学会というサークルの学生を天文学専攻の学生と同じように

扱われ、観測室や研究室にも自由に入出入りさせておられた。そのことで他の教育からはいろいろ非難を受けていたが、先生はご自分の方針を貫徹された。地方の大学で特に天文学のような実用的でない学問をして一人でがんばっている場合、周囲の無理解と闘うというよりは、周囲から取りつぶされないようにするだけでも絶大なエネルギーを消耗してしまうものである。村上先生が大変な苦勞をされて天文教育に大きな足跡を残されたことには頭が下がる思いである。私が知っているのは60歳を過ぎてからの先生で、人格高潔で慈愛に満ちた方という印象であるが、先生の愛弟子で広島市子ども文化科学館プラネタリウム主任の佐藤健氏によると、若いころの先生はかなり激しい性格だったが、40歳代に結核で片肺を切除するという大病をされてから円満になられたようだというのである。

村上先生は熱心なクリスチャンで、教育や社会活動を通じて宗教を实践された、宗教家としても立派な方だと言える。一方、鈴木先生は無神論者かどうかは知らないが、大変合理的な考えをお持ちで、特に暦に関する迷信をこっぴどくやっつけた「暦と迷信」（昭和10年）という著書があるが、この本を読んでいると先生の顔が浮かんでくるから愉快である。

鈴木先生は抜群の能力を持ちながら、東大理学部や東京天文台という学問の主流を外れた一匹狼的な活動をされたわけであるが、そのことが日本の天文教育には幸いしたと言ってよいであろう。村上先生は広島高師・広島大学という派閥の勢力の強い所で、強い意志と信仰によって自分を貫かれ天文学の教育に大きな貢献をされた。

昭和32年のスプートニク1号の打上げ以後、一般人の天文に対する認識に変化が起り、天文学者や天文ファンに対する目が変わってきたように思われるが、お二人はそのスプートニク以前から天文学の啓蒙と教育に活躍され、スプートニク以後の重要な時期に天文教育の中心的な役割を果たされたと言えるだろう。

鈴木先生が停年退官されたのが昭和43年、村上先生が広島女学院大学学長になられて広島大学を退官されたのが昭和45年であるが、ちょうどその前後に、高度経済成長、大学紛争、田中元首相の「日本列島改造論」に見られるように社会全体が大きく変化し、大学、マスコミ、出版界などにも著るしい変化が起こった。したがって、鈴木、村上両先生のような天文教育の大家は今後出現することはないであろうと想像される。

謹んで村上先生のご冥福を祈ると共に、鈴木先生のご健康をお祈りしてこの文を終りたい。